

# 巻頭言

## Preface



クセログラフィー  
(作：ヴァシリー・カンディンスキー、愛知県美術館蔵)

「一つの社会がまさかの時のためにどこまで投資をするかは、その社会の成熟度を評価する尺度である」。これは災害対策を語るときにしばしば引用される言葉である。いま世界中を震撼させている新型コロナウイルス感染拡大による脅威は、まさに大災害の脅威と言える。大災害時の対策で最も重視すべきは、この世の中で最も大切な人の命に係わる「医療」であり、まさかの時のために「医療」にどれくらい投資をするかが重要となる。

新型コロナウイルス感染が急速に拡大した国々の中には、医療崩壊をきたし、死者数が急増した国とそうでない国がある。例えば、同じヨーロッパ大陸の2つの国、イタリアとドイツ、政府の医療費削減に伴う大幅な病床削減でもともと脆弱であった医療体制下で医療崩壊を招いたイタリアに比較し、医療や検査体制が充実し、ICUに十分余裕があり重症患者に対応できたドイツでは、イタリアからの重症患者を受け入れる余裕さえあった。ドイツでは過去の災害で学んだ教訓からまさかの時のために備え、成熟していたことが要因の一つとして挙げられる。

わが国は平時の医療体制は世界一の座を占めてきたし、地震や津波の大災害にはかなり投資をしてきた。しかし、パンデミックと言う大災害に対しては十分投資してきたとは言えない。この号が発刊される頃、わが国は新型コロナウイルス感染拡大により医療崩壊の渦中にあるのか、ないのか？ わが国の成熟度が評価されることになる。

(愛知医療学院短期大学学長、名古屋第二赤十字病院名誉院長 石川 清)